

約束

細江隆一
岐阜県・三〇・公務員

交通事故にあったとき、僕は黙っていた。事実を報せると、心配した君は僕の元に飛んでくるんじゃないかと思って。僕は岐阜。君は東京。そんな遠くから君を一人で来させるわけにはいかないと思って。

けれども君はやってきた。僕はひた隠しにしていたのに、どうしてわかったんだろう。それが不思議でなかった。

「だって、電話口の様子がおかしかったんだもん。いつものリュウちゃ

んじゃないって感じがしたんだもん」

東京から岐阜までは三時間あまり。土曜日の早朝に新幹線に乗った君は、駅からタクシーを飛ばして僕の元に來た。頸椎^{けいつい}カラーをはめ、首が回らない「ロボカップ」のようになった僕は、君だけにはその格好を見られたくなかった。

ドアを開けた瞬間、君をみつけた僕はショックだった。君は僕を見るなり泣き始めた。持っていたバッグも下に落とし、立ちつくしたまま泣いたっけ。

「どうして……どうして教えてくれなかったの。二人の間に隠し事はしない、たとえ遠くにいても大丈夫だからって、そう約束したじゃない。

『何でも話すから』って言ったじゃない。嘘つき！」

約束を破って嘘をついた。君をだましていた。君を心配させ、悲しませた。僕はそんな思いに胸が苦しくなった。これで二人は終わるんじゃない

ないかって、そう思った。でも事實はちがった。君はひとしきり泣いてしまうと、僕の身の回りの世話を始めた。そうして言った。

「もう、嘘つかないって約束して。私はいいの。お金がかかって、仕事を休んでも、時間がかかってもいいの。一番大事なのはリュウちゃんの側にいることなの」

あれから三年。君は現在も東京に、僕は岐阜にいますが、二人をつなぐ絆は以前よりずっと強い。